

可能形動詞に見られる“日本語らしさ”

——その発想を日本語教育の中でどう教えるか——

森 川 結 花

1. は じ め に

au (会う) か aeru (会える) か, その母音たった一つの違いで意味も印象も変わるというのに, うちの学生はどうして可能形を使ってくれないのかしら……という日ごろの感想が, 本稿を書くきっかけとなった。以下は私が留学生と世間話をしているときに聞いた誤用例である。留学生の日本語学習者としての実力は, 初級後半～中級前半といったところで, 当然動詞の可能形は既習である。

- (1) 日本へ来たばかりのころは, 日本語を話さなかった。日本人の話, すごく速いから全然聞かなかった。テレビも全然わからなかった。
- (2) あじさいの部屋 (国際交流センター) へ行ったら, 留学生の友達に会うから, 毎日行きます。
- (3) きのうすごく遅く帰って, お父さんもお母さんももう寝たから, うちに入らなかった。かぎ, ないから。外で寝た。
- (4) このごろ先生に会わなくて, 心配してたよ, ぼく。
- (5) (自分が) 早く国へ帰ったらいいな。

会話の中ではこんな調子で動詞の可能形でなく基本形がまかり通っている。聞いている方も一瞬違和感を覚えるのだが, 基本形でも一応意味が通るグレーゾーンのような感じもするので, 何ら指摘もできぬまま通り過ぎていた。しかし, 彼らの意のあるところを厳密に汲んで, それをネイティブの日本語話者の言語感覚で表現すると, 可能形が選択されて当然と思えるのである。すると, 学習者の(1)～(5)の誤用 (可能形/基本形の誤選択) は日本語教育の側に責任があるのか, という反省が生じてくる。

本稿では, 初級後半から中級前半段階での日本語学習の場でとりあげられる動詞の可能形¹⁾, および可能形の用法を分析し, 学習者にとって何が分かりにくい (あるいは意識に上っていない) のか, そして, 日本語ではどういう発想からどのような場合に可能形を選択するかについて考察し, 教師が学習者に伝えるべきポイントをまとめてみたいと思う。

なお, 本稿では主語 (主体) が人間で, 動詞も意志性のあるもの (動作動詞, 変化動詞) に限定して論を進めていくことにする。

2. 誤用（あるいは誤選択）の起因するところ

可能形にするべき動詞をなぜ学習者は基本形にしてしまうのか。学習者²⁾側の問題点と、それに対応する教える側の問題点をまとめておく。

学習者側の問題点	教える側の問題点
①語形変化がまだできない	←十分に練習させなかった
②（母語から考えて）基本形を使った	←教科書／教師が母語訳を不注意に与えた。
③可能形でも基本形でもいいと思っ てい る	←教科書／教師が与えた例文で差異について説明不足／説明が不適切。
④日本語の可能形の特徴的な性質が把握 できていない	←教科書／教師の説明不足。

①は単純な問題で、ある程度時間が解決するという事も有り得るので、本稿では考察の対象から外し、②～④を日本語教育の問題として、少し詳しく考えてみたい。

3. 初中級レベルの日本語教育で扱われる可能形動詞と、その問題点

まず、オーソドックスな日本語の教科書『新日本語の基礎Ⅱ』『IMJ Grammar Notes』『I J 中級の日本語』³⁾から、可能形動詞が用いられる構文とその例文を提出順序に従って示す。（数字はレッスン番号）

◆可能形動詞が用いられる構文⁴⁾

	『新基礎Ⅱ』	『IMJ』	『I J』
構文A 可能形の導入	27	17	
構文B-1 V (pot.) ようになる	36	30	1
構文B-2 V (pot.) なくなる		20	
構文B-3 V (pot.) (ない) ようになっている		30	
構文C V (pot.) ように、～～	36		9
構文D ～～て、V (pot.) ない	39		
構文E V (pot.) (なく) て、感情動詞／形容詞	39		
構文F V (pot.) といいんですが		19	
構文G とても～～V (pot.) ない		17	1 } 副詞と
構文H なかなか～～V (pot.) ない	27		2 } の共起

◆代表的な例文

- 構文A
- わたしは日本語が少し話せます。（新基礎Ⅱ）
 - 今晩は早く帰れます。／帰れません。／帰れそうです。帰れるかもしれません。

／帰れるはずです。(IMJ)

- 構文B-1
- ・日本語が話せるようになりました。(新基礎Ⅱ)
 - ・将来はだれでも月へ行けるようになるんじゃないでしょうか。(IMJ)
 - ・漢字を勉強しなければ、日本語の新聞が読めるようにはなりません。(IJ)
- ク -2
- ・急に用事ができて、音楽会に行けなくなってしまいました。(IMJ)
- ク -3
- ・戸にかぎがかけてあって、だれも入れないようになっています。(IMJ)
- 構文C
- ・みんなが楽しめるようにチョコレートをあげた。(IJ)
- 構文D
- ・あした、いっしょに映画を見に行きませんか。
 - あしたはちょっと、都合が悪くて行けません。(新基礎Ⅱ)
- 構文E
- ・パーティーに行けなくて、残念です。(新基礎Ⅱ)
- 構文F
- ・奨学金がもらえるといいんですが。(IMJ)
- 構文G
- ・そのほかに駐車料金や税金など、とてもはらえません。(IMJ Dialogue)
 - ・東京ではとても家なんか買えません。(IJ)
- 構文H
- ・日本人の名前は難しいですから、なかなか覚えられません。(新基礎Ⅱ，練習B)
 - ・漢字がなかなか覚えられなくて、困っています。(IJ)

3.1. 訳文の問題点

よほど語学的センスの優れたものでない限り、日本語学習の最初の段階では、言表内容をまず母語で考え、それを翻訳するという手順で日本語を考えるか、もしくは日本語の文を母語に訳してみて意味内容を確認する学習者がほとんどであると思う。日本語教育の現場でも新しい文型を提示する際、たいていの教科書には例文に訳文(英訳)がつけてある。訳文は、教師にとっても学習者にとっても、メタ言語による説明を与えたり理解したりする手間を省ける手段として有効なものである。

しかし、訳文を付けるうえで、元の日本語に忠実な逐語訳にするか、もしくは英語話者にとって自然な英語訳を付けるかは、いずれも一長一短があるであろう。前者の欠点は、学習者が長々としたメタ言語としての英語から日本語にアプローチする(日本語の文を作る)という手順を“習慣”として持ってしまうということであり、後者の欠点は、どうしても母語から自立できない学習者が日本語の文を作る際に母語の干渉によって間違ってしまうということである。

本稿で問題にしている可能形動詞に関して、両者の例をあげておく。

まず、逐語的訳の例としては次のようなものである。

1. 将来はだれでも月へ行けるようになるんじゃないでしょうか。

Isn't it the case that anyone will be able to go to the moon in the future?

2. うちの子はこのごろ野菜を食べるようになったんですよ。

(It has gotten so) my child eats vegetables now(adays).

3. A: お宅の赤ちゃんはもう歩けるようになりましたか。

Has your baby started to (be able to) walk yet?

(中略)

9. 戸にかぎがかけてあって、だれも入れないようになっています。

The doors are locked, and (it is made so that) no one can enter.

(以上, IMJ 第30課145~146頁より 下線は筆者による)

上の 1.2.3.のように、日本語の文での基本形/可能形の違いを、英訳文の方でも反映させており、3.ではその姿勢をあくまでも貫かんがため () に入れてまで be able to を訳出しようとしている⁵⁾。

次に、自然な英語の例としてあげられるのが、日本語では動詞は可能形で用いるが、英語ではわざわざ can/be able to の形にせず to 不定詞などの形で用いられるのが自然な言語形式であるものである。これが学習者に“日本語では可能形にすべきところを基本形ですませてしまう”という間違いをさせてしまうのである。具体的には次のようなものである。

- a. 漢字がなかなか覚えられなくて困っています。

It's terrible because it takes a long time for me to memorize Kanji.

- b. コーヒーを飲んだので、なかなか眠れませんでした。

I had coffee, and so I couldn't fall asleep easily.

[i.e. I had a hard time falling asleep.]

(以上, a.b. は IJ 第2課38頁より 下線は筆者による)

- c. 家族に会えなくて、さびしいです。 I miss my family.

- d. お会い出来て、うれしいです。 I'm glad to see you.

a~dの英語に引きずられて、学習者は

- a'. 漢字がなかなか覚えなくて困っています。

- b'. コーヒーを飲んだので、なかなか眠らなかった (/寝なかった)。

- c'. 家族に会わなくて、さびしいです。

- d'. お会いして (/会って) うれしいです。

という日本語としては誤用になる文を作ってしまうのである。

このように、訳文は説明が省けて便利だが、一方で“悪しき習慣づけ”か“母語の干渉による誤用の発生”か、どちらかのリスクを背負っていること、教える側としてはこの得失に通じている必要がある。

3.2. 例文および説明の問題点

構文B-1, C, E, G, Iには、動詞が可能形になる場合と基本形になる場合がある。それが教科書に例文として並べてある場合もあれば、学習者が教室などで作例して出てくる場合もある。例えば次のようなものである。

構文B-1 日本へ来てから、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{魚が食べられる} \\ \text{魚を食べる} \end{array} \right\}$ ようになりました。

構文C 寝るときでも $\left\{ \begin{array}{l} \text{見られる} \\ \text{見る} \end{array} \right\}$ ように、天井に漢字の表を貼っておいた。

構文E ここに $\left\{ \begin{array}{l} \text{来られて} \\ \text{来て} \end{array} \right\}$ よかったです。

構文F (私が) テストで $\left\{ \begin{array}{l} \text{いい点が取れる} \\ \text{(うちの子が) テストで いい点を取る} \end{array} \right\}$ といいいんですが。

構文H 納豆がなかなか食べられなかった。
おふろがなかなか沸かない。

この使い分けが、主語が一人称のときは可能形で、三人称のときは基本形である、とか肯定のときは可能形で、否定のときは基本形である、というふうにすっぱり割り切れるものであれば学習者の方も混乱はない。が、動詞の種類（例えば動作主の意志によって制御ができるか否か⁶⁾）によって違うとか、その事態を話し手がどう認識するか（「魚が食べられる」という新しい能力が出来たのか、「魚を食べる」という新しい習慣が出来たのか⁷⁾）など、微妙な事情によって違うとなると、学習者によって理解に差が出てくる。

例えば、IMJのGrammar Notesには構文Fの説明として「との前件は出来事か他人の行為であるので、話し手の行為であることを示すには、動詞の可能形が使われる」という説明がなされている⁸⁾が、なぜ話し手の行為が可能形で表されなければならないのかという根拠もなく、また、他人の行為でも可能形が使用される例も現実に存在する⁹⁾のである。学習者の立場からすれば、可能形か基本形かの選択基準（ないし法則性）の提示が一番望まれるところなのであるが、説明をすればするほど、そこから遠ざかってしまうという結果になりかねない。

4. 実例にみる日本語の可能形動詞の特質

さて、本稿は、先にも述べたように日本語教育の立場から、日本語教育の実践現場において学習者が日本語の可能形動詞の持つ特質を理解し、場面・必要に応じて使用の必要性が意識できるようにすることを目指している。その糸口とするべく、日本語の実例から可能形動詞の特質といえるものの分析を試みたい。

特質といってもいろいろな側面があるが、ここでは“日本語らしい文化的な”特質について考える。というのは、それが抽象的な言語学的な説明よりも学習者にとって理解しやすく、か

つ、学習者の日本語学習に対するモチベーションを高めることにも繋がると思うからである。

日本語の「受身」はいわゆる「被害受身」という名称に見られるように、文法性の中に日本らしい文化的な側面が取り出され、それが定着している。日本語教育の現場でも多かれ少なかれその流れを汲んで、その文化的名称を学習者の理解の助けとすべく“利用”している。これに対して、「可能」については、そのような文化的な側面を利用した紹介はされて来なかった。しかし、「可能」も、全くニュートラルな文法の一形式ではなく、日本の文化や国民性に根ざした日本語の世界独特の概念を担っていることが学習者の前に明らかにされれば、“なぜ日本語ではこんな場面で可能形が用いられるのか”ということも理解しやすくなると思うのである。

結論から先に言うと、日本語の可能形動詞には

- ① 認識主体の願望実現の状態とアスペクト的側面において関連している。
- ② 基本的に「できる」ことは「よろこばしい」という好感情に結び付く。
- ③ 「できる (できた)」のは、自分以外の何かの「おかげ」という“他力”の存在の意識がある。

という特質があると思われる。以下、詳しく検討する。

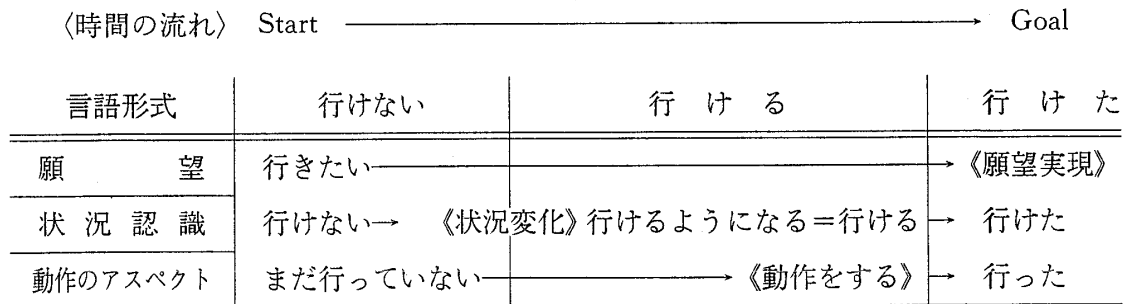
4.1. 認識主体の願望と可能形動詞とのアスペクト的関連¹⁰⁾

(6) 学校に行きたいが行けない生徒たち (見出し)

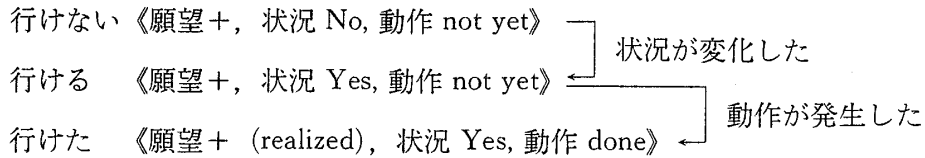
最近学校に行けない (行きたい意志がある) 子供たちが増えている。(本文)

(毎日新聞1998年9月25日夕刊ミラー・ワールド)

(6)の例に見られるように、認識主体 (生徒たち/子供たち) がその時の自分の能力ないし自分がおかれている状況を「行けない」と感じるのは、「行きたい」という願望の存在が前提になっている。「行きたい」という願望が未実現のとき、動作の側面としては「まだ行っていない」という状態にあることになる。認識主体の内面 (願望) とその場の状況認識 (行為ないし変化することが可能かどうか)、そして動作 (変化) のアスペクト的側面を時間の流れにそって関連づけることができる。それをまとめれば下の図式のようなになる¹¹⁾。



すなわち、可能という言語表現の背後にある三要素を概念表示化すれば、



となる。

(7)の実例では可能形動詞を用いて、ひたすら願望の実現を待望する認識主体の心情を表現している。

(7) T・S・エリオット先生は、よほどネコがお好きのようだ。ぼくもネコが大好きだから、すこしは、エリオット先生の学恩にあずかれるかもしれない。ネコのダンスに見とれていたなら、詩人になれるかしら。いま、ネコのおかげで、今世紀最大の詩人は、ウエストミンスター寺院でやすらかに眠っている。この絵本をたのしく読めたら、だれだって詩人になれる。きつとなれる、と、ぼくは信じている。(田村隆一(1991) 訳者あとがき T・S・エリオット『魔術師キャッツ』ほるぷ出版)

(7)の例で、書き手(認識主体)は「できるかな、できるかな、きつとできるよ、できるよね」と、かすかな期待から徐々に願望の実現への思いと確信を強めていっている。それは即ち「そうできたらいいと思っているのだが、今はできない(／できていない)」というふう¹⁰に現状を把握しているからこそ発せられた願望の在り方なのである。

「願望が実現するまでのプロセスが長く困難なものであった」というのも一つの表現類型になっているようだ。次の(8)の実例のように、「なかなか～～V (pot.) ない」「やっと・ついに・とうとう～～V (pot.)」などの副詞とよく共起すること、また、(9)の実例の民話や児童文学に見られる成功譚物語の結末のパターンからそのことをうかがい知ることができる。(10)は、そのパターンを子供が踏襲している例である。

(8) (アメリカに渡った筆者はミシガンでつらく長い冬を過ごし、フロリダの海岸で出会った少女によって新生を経験する)

この突然の言葉を前にして、私は頭の芯がマヒしたように感じた。私がとっくの昔に置き忘れたもの。純粹な感性、澄んだ魂とでも言うべきもの。それを今、この異国の地でこの少女に見た。そう思った。……《略》……長いあいだ必死に探し求めてきたものに、やっと 巡り会えたような気がした。

(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』CD-ROM版新潮文庫の100冊241頁)

(9) けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなってきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちょうど、このお話のはじまりのようになる筈の、たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かい**たべもの**と、明るい薪で楽しく**暮らす**ことができたのでした。

(宮沢賢治「グスコブドリの伝記」『ゼロ弾きのゴージュ』角川文庫所収154頁)

- (10) 星を空に返す方法 (空から星が落ちてきた。森の動物達が相談して何とか星を空へ返そうと試みる) そしたら、こんどはみんなで相談をして、うさぎが言いました。「そうだよ、ながーい笹を持ってこようよ。それに星を乗せてあげてさ、空までさ、送ってあげるのさ。」と、うさぎが言うと、みんなは「そうしよう。」と言って、笹を持ってきました。みんなでその先に星を乗せると、土の中に埋めて一日待ちました。そうすると、その笹は一日だというのに、ぐんぐん伸びて空に届きました。そして、星は空に帰ることができました。そして、その誕生日の終わった後、みんなが、家で空を見ると、キラキラ光ってる、とてもきれいな星がありました。みんなはその光ってる星を、きっと落ちてきた星だと思ったのです。おしまい。[M・T 五歳一〇カ月]

(内田伸子1990『子どもの文章 書くこと考えること』東京大学出版会 p. 27~28)

4.2. 可能形動詞に伴われる行為者の感情

「したい」けれど「できない」ということは、その人にとって不如意なことである。(11)(12)の例のように、たとえ言語表現上に表されていないとしても、「できない」ことに否定的な感情(たとえば悲しみ)が伴われていることは、そのコンテキスト全体から容易に推測できる。

- (11) いまは、保母さんのこと「ちゃーちゃん」と呼ぶけれど、ほかのお友達もいるから、なかなか甘えられないんだよね。(毎日新聞1998年8月26日朝刊 地域のニュースきょうと「あなたの愛の手を」たくみくん)

- (12) 逢えないとき 受話器から聞こえる 君の声がかすれてる (Kiroro (1998)「長い間」)

それが、プロセスを経て願望がかなった時には肯定的な、喜ばしい感情に変わるのは当然のことであろう。(13)のような手放しの喜びを直接的に表現しているものもあり、また、成功譚物語の最後の結びに添えられる決まり文句「めでたし、めでたし」も願望実現の喜ばしさを示している。

- (13) バンザイ 君に会えてよかった このままずっとずっと ラララ ふたりで (ウルフルズ (1996)「バンザイ〜好きでよかった〜」)

4.3. 障害を取り除く《他力》の存在

再度(8)の例を検討したい。

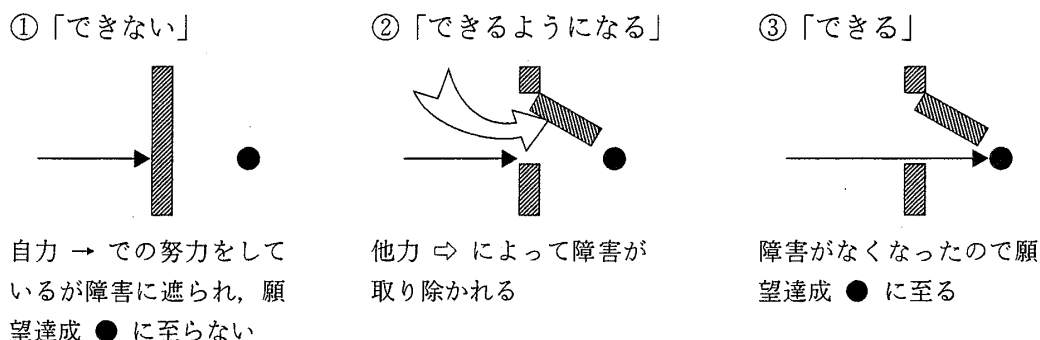
- (8) 長いあいだ必死に探し求めてきたものに、やっと 巡り会えたような気がした。

「長い間必死に探し求めてきた」のは行為主体の意識的な、《自力》による行為であるが、結末は「巡り会った」のではなく「巡り会えた」と表現されている。このように表現されると、その結末は自分で勝ち取ったのではなく“偶然”によるものだった(自分は幸運だった)という意味合いが感じられる。

願望の実現を阻んでいた状況を、自分の力ではなく、何か別の力《他力》が取り除いてくれた……こういう考え方が日本語の社会に通念として存在していることを示すのが、「おかげさまで」という言葉である。自分の成功なり幸運なりは(14)のように「おかげさまで～～できました」と謙虚に表現するのが日本語としては当然のことである。

(14) おかげさまで 何とか希望校に合格することができました。

以上のように考えてきた日本語の可能形動詞（「できる」）を、Sweetser (1990) が may と must の解釈で試みた力のダイナミックスの図式を応用して表してみると、下図のようになろう。日本語に独特なのは⇒で示された「他力」の発想である。



4.4. ま と め——なぜ、基本形ではおかしいのか

以上のように、可能形動詞に ①認識主体の願望実現の状態とアスペクト性、②「できる」ことに伴うよろこばしい感情、③できる（／できた）ことに関わる「他力」の存在という三つの特質を認めた。「可能」という言語形式が、願望という認識主体の内面の在り方に基づいて外的世界を捉え、そして、喜び／悲しみの感情に直結していくと考えると、人間くささのない無色透明の文法形式であるとは言えず、むしろ事態を人間を中心にして捉え言語形式化したものであるとすることができよう。このような事態の捉え方を、池上（1998）の言う〈感覚〉スキーマの延長線上に位置付け、日本語の「可能」における「日本語らしさ」として認めたい。③の「他力」が日本の文化を反映したものであることは特に議論を必要としないだろう。

以上を踏まえたうえで、冒頭に上げた(1)から(5)がなぜ日本語話者の言語感覚では誤用と感じられるのかを分析しておきたい。

まず、5例とも、話し手に「そうしたい」という願望があるにもかかわらず、可能形を使っていないがために願望が達成できない状況下での悲しさや、できたときの嬉しさなどの感情の色合いが全く表現されず、話し手が表現しようとしている状況に全然そぐわないのである。特に(4)「このごろ先生に会わなくて、心配したよ」は、前件（無感情）と後件（有感情）とで、言っていることのつじつまが合っていない。

(1)から(4)は、基本形使用によって、その行為の意志性が前面に出る結果となり、「自分の意志で話さなかったのだ。」etc. という意味合いができてしまう。これが日本語話者の感覚では「不遜」な感じがして好ましくない。とくに(2)(4)は「会う」という行為だが、「会う」

という行為には相手が必要で、自分の勝手な意志だけで会えるとは限らないのである。「会う」ことには自分の力の及ばない他者との巡り合わせ（他力）が必ずある¹²⁾。

(5)の構文「～～といい」は、そもそも「自分」にはコントロールできない状況の変化を望むものである。その構文で基本形を用いて(5)のように言うと、自分の影響力の及ばない他者が勝手に国へ帰ることを希望していることになってしまう。これでは、自分が帰れない状況の真っ只中にいることを認識し、かつ、その状況が変わることを希望していることにならない。このような理由で、日本語話者が聞くと、「あれ？」と一瞬違和感を覚える結果になっているのだと考えられる。

5. 日本語教育の現場への還元

日本語の可能動詞について以上のように分析し考察してきたが、最後に、日本語教育の現場で学習者に伝えることにどんな意義があるかを考えておきたい。

日本語教育の現場にあって学習者は日本語を学習する以前には言語の構造に対してさほど意識的でないのが普通である。何か学習上の問題につきあたったときに「そんなこと、自分の国の言葉でも考えたことがなかった」と言う学習者のほうが多いと考えていい。だから、無理やり抽象的な知識をつめこむより、一見遠まわりのようであっても、日本語表現の背景となっている文化を紹介する方が、新しい文型を学習する動機を高めることになる。学習者は、彼らにとって異文化である日本および日本人の「心」には非常に興味を持っているものである。多くの学習者にとって、無味乾燥な文法より人間らしい文化の話の方がとっつきやすい。

牧野(1996)は語学教育の中で文法とからめて文化を教えることの利点について、次のように述べている。

第1に、文法の中に文化的な概念がはまり込んでいるので、文法を教えること、習うことは即、文化を教えること、習うことになります。第2に、第1の帰結として、深層の文化を別枠で教える必要がなくなります。つまり、言語と文化はもともと便宜上二つに分けているのにすぎませんが、それをもう一度再結合させることができます。第3に、今の語学教育は一般にタスク中心で文法中心ではありませんが、文化で切られた文法は、文法がいわば文化的受肉をしていることから、文化的なコンテキストの中で遂行されるタスクと接近してきます。(序文)

つまり、学習者の関心を文法に全く向けさせないというのではなく、学習者が関心を向けやすいところからアプローチしていくことが一石二鳥か三鳥の成果につながるのである。

日本語教育の中に、日本の文化の特徴あるいは日本人の心とはどんなものか、この文型にはどのような文化的コンテキストが背景となっているのか……というような視点を積極的に「利用」することで、より多くの学習者に「文法を習う」ことのポジティブな面に気づいてもらえれば、と願うのである。

ちょうどこの論文の執筆と時を同じくして、私が教えている留学生(1998-1999 Year-In-Konan プログラムCクラス、プログラム開始後6週目)に教室で、複数人から“動詞を可能

動詞にしなかった誤用例”が出て来た。

- (15) ホームステイの長所は、
 { 日本語を話す
 { おいしい食事を食べる
 { 家族と住む } } ことです。
- (16) 日本へ来て一番よかったのは { 友達に会う
 { 友達を作った } } ことです。

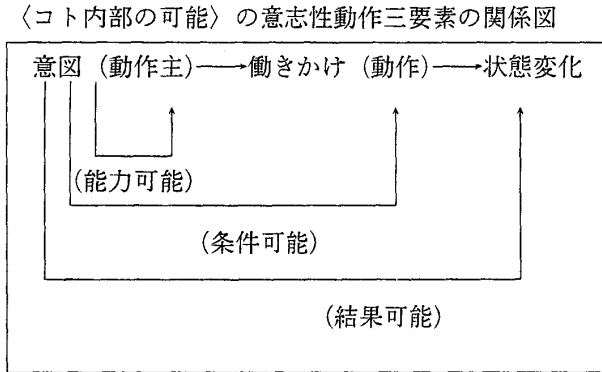
彼らの母国語のセンスでは、これは単なる基本形の動詞で十分で、それ以上あまり繊細に考える必要のないものなのであろう。しかし、日本語は、「できる(できた)こと」を前向きに考えて言語表現上も普通とは違った形態で表す文化を持っているのである。彼らがプログラムを終える前に、それをどこまでどう伝えたらいいか。実践の現場で考えていきたい課題である。

〈注〉

- 1) 可能動詞とは通常、動詞の語尾が(強活用動詞語根+eru/弱活用動詞語根+rareru)に変化したものだが、本稿の論旨では、「～ことができる」も同様に考えることができるので、特に区別せず用例などにも取り上げている。
- 2) 学習者に関しては語学学習者として標準的な者を対象に考える。外国語学習の適性に欠ける学習者、あるいは怠慢な学習者などは考察の対象としない。
- 3) 『新日本語の基礎Ⅱ』は夏期日本語集中講座において、また『IMJ G. N.』『IJ』は Year-In-Konan プログラムにおける初中級から中級前半のメイン・テキストとして、甲南大学の日本語の授業でテキストとして使用しているものである。
- 4) ここではV (pot.) という形で表示したが、これらの構文は動詞が可能形でも基本形でも用いられる(つまり、可能形専用ではない)ので、実際の教科書では“Clause(pres.)”(IMJG. N.), “V(plain)”(IJ)のように表示してある。
- 5) このように厳密な訳文であるが、学習者からは時折「この本の英語は変です」という声が聞かれる。かなり説明的な言い回しになっているのが、彼らの英語話者としての言語感覚からすれば不自然でくどい印象になっているのではないだろうか。
- 6) (略) In this construction, X often contains a potential verb, negative form or stative verb, which normally can't be controlled by one's will. (IJ 第9課「～ように～」の説明)
- 7) (略) using a verb that does not reflect ability or potential will render the meaning that “a habit which did not exist before has been acquired.” (新基礎Ⅱ文法解説書 第39課“～yō ni narimashita”の説明)
- 8) The clause preceding to express an event or someone else's action. In order to express speaker's action, the potential form of the verb should be used. (IMJ G. N.)
 レンタ・カーがかりられるといいですね。
 I hope we can rent a car.
 ジョンソンさんがこちらにいらっしゃるうちに、ごりょうしんもおいでになるといいですね。
 It would be nice if your parents came here while you (Mr. Johnson) are still here, wouldn't it?
- 9) 話し手が第三者に心情的に深くコミットしていれば、「みよちゃんが早くおんもに出られるといいね(と僕は思っている)。」のように三人称が主語に来ても可能動詞の使用が可になる。
- 10) 〈可能〉の根底に〈希望〉が存在していることは、先行研究(藤井1971, 森田1977)で既に述べ

られており、本稿もそれに同意している。その他の先行研究（例えば、奥田1986）で議論されて来た「可能の意味」の下位分類（実現可能／能力（潜在）可能など）について、本稿は特にこだわらず、大きく「可能」全体を問題にしている。

- 11) 張（1998）にも下図のような図式がある（255頁）が、本稿が提示しているような時間軸は設定されていない。



- 12) 「会う」という動詞の用法を考えると、「あなたに会えてよかった」「お会いできて光栄です」「またお会いできる日を楽しみにしています」など、決まり文句のようになった可能形のフレーズがあることに気づく。

参 考 文 献

- 青木ひろみ（1997）「自動詞における《可能》の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育』93号
- 池上 嘉彦（1998）「日本語らしさの中の〈主観性〉」正・統 第7回日本語を考えるためのCLC言語学集中講義「日本語の文に見られる主観性」講義レジュメ
- 井島 正博（1991）「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 奥田 靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」言語研究会編『ことばの科学1』むぎ書房
- 小矢野哲夫（1979, 1980, 1981）「現代日本語可能表現の意味と用法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」『大阪外国語大学学報 言語』45, 48, 54 大阪外国語大学
- 渋谷 勝巳（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1 大阪大学
- 渋谷 勝巳（1995）「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上） 単文編』くろしお出版
- 張 威（1998）『結果可能表現の研究 日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版
- 藤井 正（1971）「可能」『日本文法大辞典』明治書院
- 牧野 成一（1996）『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』NAFL選書12 アルク
- 森田 良行（1977）『基礎日本語Ⅰ』角川書店
- 山梨 正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics* Cambridge: Cambridge University Press.

日本語教科書

- 海外技術者研修協会編（1993）『新日本語の基礎Ⅱ』スリーエーネットワーク
- Simon, Mutsuko Endo (1987) *Supplementary Grammar Notes To An Introduction To Modern Japanese Part 2: Lessons 16-30*. Michigan: Center for Japanese Studies The University of Michigan
- Miura, Akira & McGloin, Naomi Hanaoka (1994) *An Integrated Approach To Intermediate Japanese* 中級の日本語. Tokyo: The Japan Times